

艶色

工月其

衛

成人向



绝色

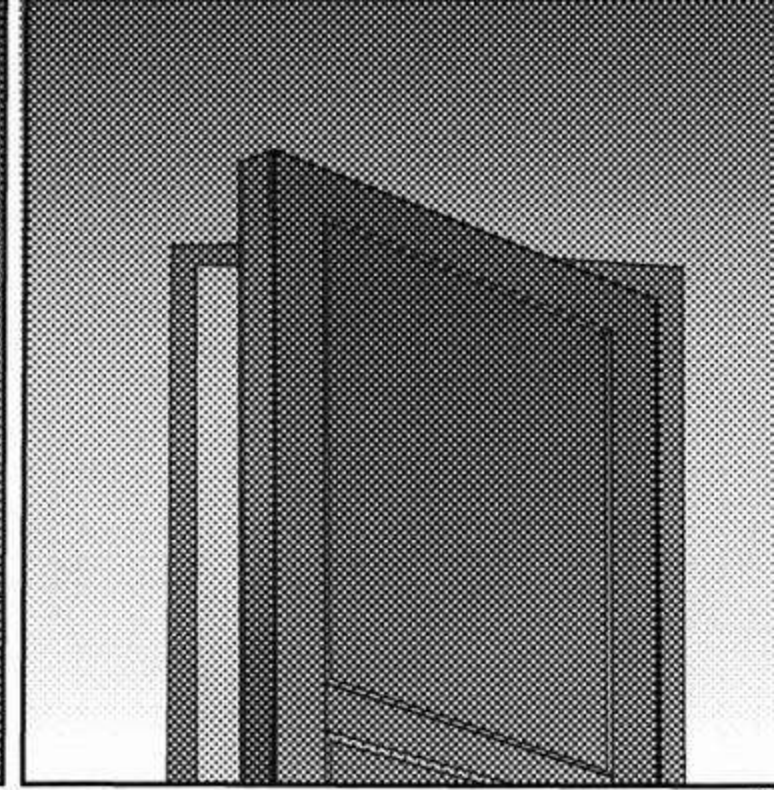
新月II

捍卫

艶色 エンシ

斯月工 コノウ

衛 エイ



私……
また……私は
……こんなコトを



ククク……
これで君と身体を
重ねたのは
何回目になるかな

最初はあれだけ
拒絶していたと
いうのに……

いまや自らソレを挟み
啜えているのだから
わからんものだよ

い……
「ソレ」……

中佐の
命令で……

ほお……

そうだった
かね？

んんん





射^で精^でる^でツツ

ぐじぐじ

んが
ぶ
ん
ん



相変わらず
スゴい
ニオイ……

はあ

でも……今日は
これで……

んやあッ

めろッ

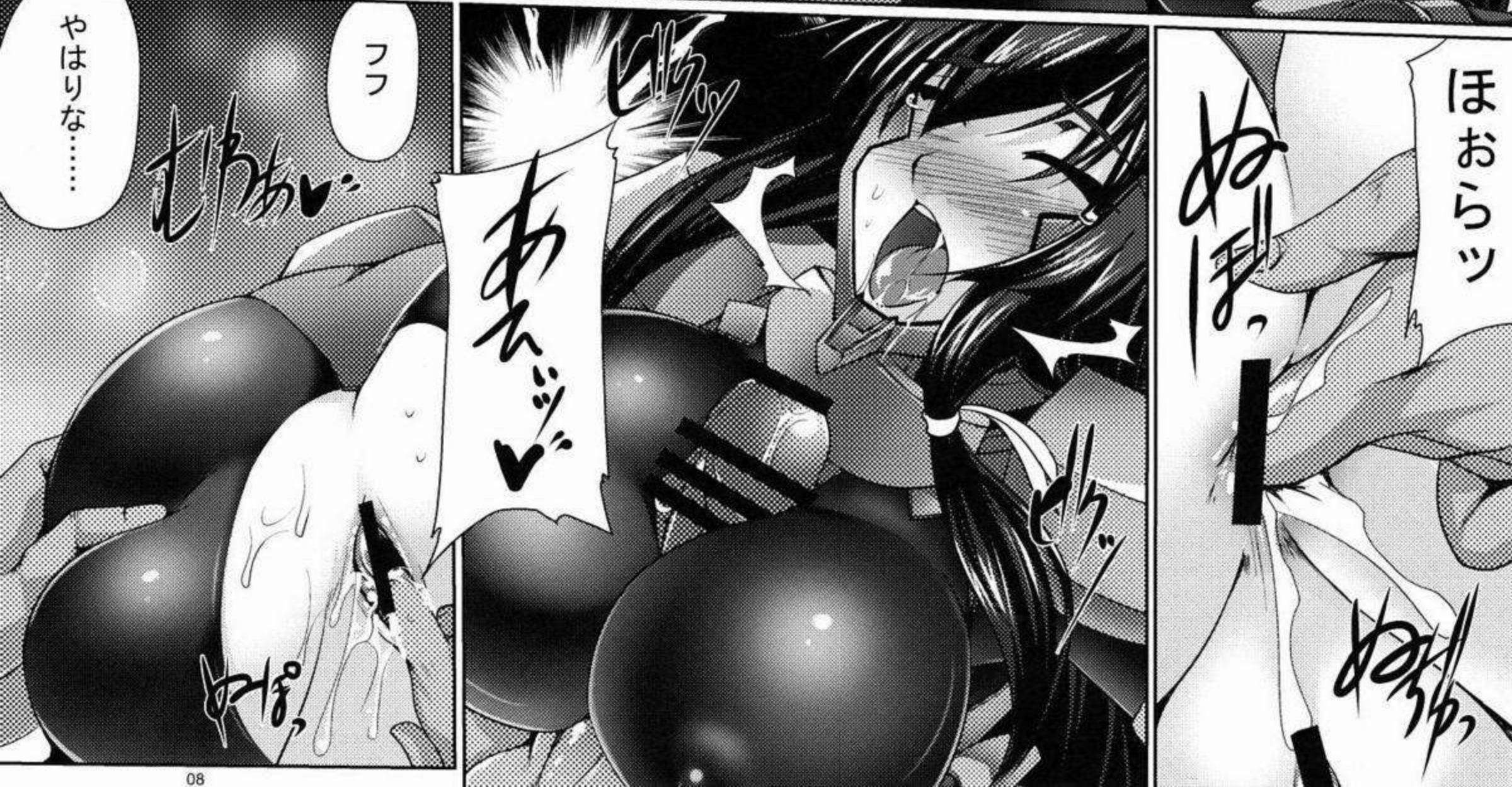


そ……
そ……

クックック

さっきはココを
少し弄っただけで
随分と喜んでいただけ
じゃないか

な……



ほおらッ

ぬほッ

あ……

フフ

やはりな……



そんな……
お尻……なんてッ

気持ち悪い
だけですッ



こちらも
素晴らしい反応だ

流石 日本人は
こちらの才能も
あるようだ



でも……
ほんなの……ッ



今日から一週間
常に身に着けて
いたまえ

いいかね
コレは命令だ



まずは割けない
ように軟膏も塗ってな

本当にそうかな？
暫くコレを付けて
過ごしてみたまえ



「……」

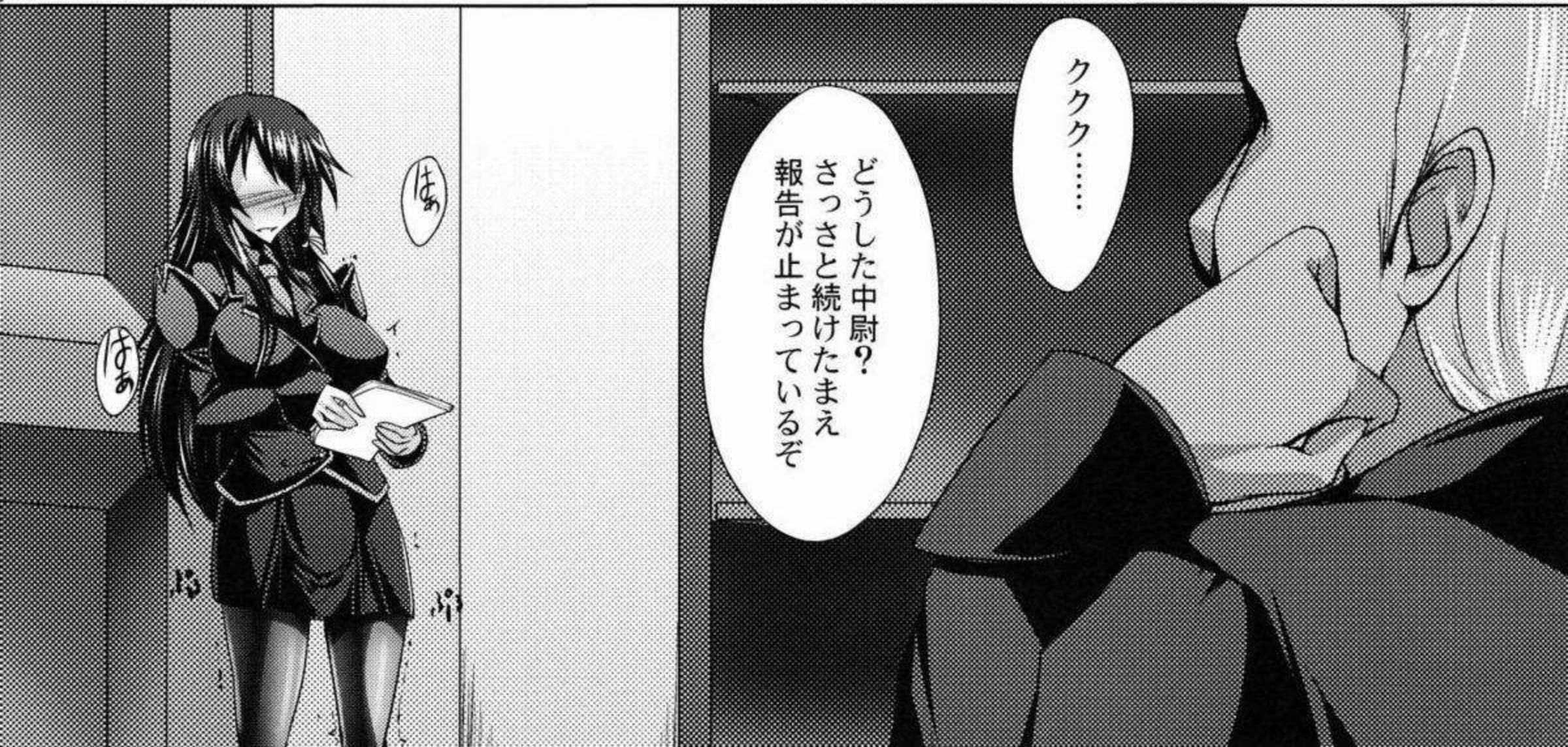
ふっ……
よし効率……的な
……運用が……

かの……かの……
に……なに……
く……

篁唯依
調教開始から
——二日目

ダメ……
こんなの

気持ち悪いだけ
……なのに



ククク……

どうした中尉？
さっさと続けたまえ
報告が止まっているぞ

はあ

はあ



しかし
軍人たる者……

それとも
具合が悪いのかね

息が荒いぞ？

シヤンと
したまえ！



こんな……
お尻でイッちゃっ
……なんて……え



あー



あー

アレから
また二日——

篁唯依
調教開始から
——四日目

今日は下着を
着けずに訓練を
するよう命じられた

勿論——

あの器具は
挿入れたままで——

ダメ……
これ以上
走るなんて……





おっ

おま

おっ

これ……
らめえ♡

おしりホミホミ
JUNJU

おま、
おま、
おま、

おま

おま

手が……
止まらない♡

あたまがおかしく
なっちゃうのぉ♡

でも……
これじゃまだ
たりない……ッ

篁唯依
調教開始から
——六日目



女メえ♥
こんなのにゃ……
腸奥まで挿入れても
……おお♥

もじり……
太くて硬いの
腸奥まで……え



ククッ
そろそろ頃合か



はっ
あぶ



こんなのにゃ……
……ッ
全……然
足りない
……ッ

やはり
素晴らしいな

本当に……

この格好で
するのでしょいか

全く……
立っているだけで
男を惑わせる

メスのニオイ
をプンプンさせて
いるじゃあないか

なあ？

そんな事……

さて
約束の一週間だ
流石に辛かろう





はぁ、

はう？

肛門もぷっくりと
めくれ上がって……
腸液が止め処なく
溢れているよ？

はぁ



くくッ

はぁ

んっ



はぁ

んっ

そらッ



はぁ

はぁ

ほおら……

二本を軽く
飲み込んで
しまったぞ？

はぁ

はぁ



肛門をっなくこ玩具じゃ
満足できないたごめっ



はぁ

おっと……すまない
そういうえは君は
尻穴など気持ち悪いと
言っていたね

これ以上無理強い
するとい……

おチンポ挿入れて
くださいいッ

んっ

はぁ

あ

捧げますッ
お尻の処女も
全て捧げますッ

卑しい雌斯衛の
肉穴全て
捧げますからあ♥

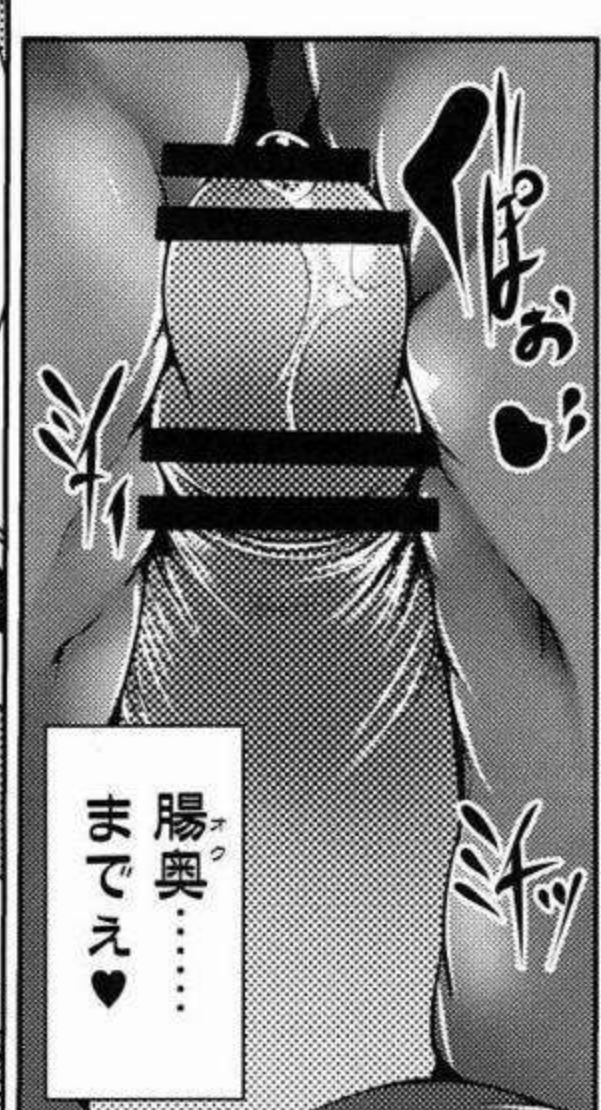


まへん♥



肛門をこんなに
拡げて恥ずかしく
ないのかね？

すんなりと
奥まで挿入ったぞ？



腸奥……
までえ♡

熱くて
カタいのが……

や……だあ♡



わあん♡

音……
吐き出し……♡



まあっ♡

あみま
ひええん♡

おひりあぶっ♡
いいんれあうっ♡



深〜

んっ♡

んっ♡



ハハハッ

自分から恥ずかしい音を出しておいてよく言うよ

ふふい

んっ



唯依を♡

ゲームン
タンクにい♡



も……
もうッ

くうっ

射精
してえ♡

唯依のケツ穴
精液で満たしてえ♡

んっ



精液専用の
肛門斯衛便姫に♡

しゅんすい
♡♡♡♡♡

ぐわん

ぐわん

あゝい
い

ぐわん

ぐわん

ぐわん



—アルゴスーより
CP!!...どうした?
応答してくれ

—こちら
アルゴスー

ホラ 指示を出して
やりたまえ
困っているじゃあないか

あぐらッ

はあ

はッ

はッ

はッ

はッ

はッ

はッ



風戸つねきん
おおお……♡

こんな
状態で……



—おい
どうしたんだ？

—応答してくれ
……中風ッッ

射精すぞおッ



少し体調が
優れないだけ……
問題……ない♡

はあ……う
大丈夫……夫



——おいつ
大丈夫か
唯依
唯依
唯依ツツ



はーい

To Be Continued...?

次ページよりゲストの黒色彗星帝国さんの
短編小説になります。
挿絵も入ってますので
是非是非お楽しみください。
それではまた、あとがきで。

艶色 エンシ
新月工 コウ
衛 エイ

「ワルイオンナ」

戦術機に乗っている際の昂揚感、そして降りた直後に生じる独特の火照りのようなものには、今もまだ慣れない。

ブルリと肩を震わせ、前髪の先から汗の雫を滴らせながら、ステラはほうつと小さく息を吐いて新しい愛機を見上げた。F-15ACTV・通称アクティヴ・イーグル。長らく乗り続けてきたF-15Eと比べ、あらゆる性能が格段に向上しているそれを、ステラは早くもモノにしつつあった。

自分で乗ってみて、改めて良い機体だと思う。ヴァレリオやタリサが気に入るはずだ。もつとも、そのタリサも今は不知火式型の慣熟のために日夜奮闘しておりそちらに余念がない。

「ん……っ」

まだ熱い機体脚部に触れ、アクティヴの機動力、瞬間の加速を思い出して身震いしながら、ステラは紅潮する頬を微かに弛めた。演習だからこそむしろ叩き出せる速度。開発衛士のみが味わえる恍惚と、実戦のヒリつくような緊張感とを頭の中で比べ嘆息しながら、もどかしげに身を振る。

周囲に木霊する整備兵達の怒号の中、たった一つの音を探して耳を澄ませ、肌寒い風が吹いているはずのハンガー内で上気した身体を持て余しながら、ステラはようやく待ち人の足音が近付いてきたことに歓喜した。

「あ……ブ、ブレイメル……少尉……」

自分を見つけた彼の喉がゴクリと鳴るのが聞こえたのと同時に、ステラは上唇を艶めかしく一舐めした。

それは、ある種の儀式めいたものだ。

「ンツ、ちゅっ、……ふふ、はむ……ん、ちゅば、ふ、ああ……っ♡」

「ふむう、う、うう！ はあ、んぶっ、じゅる、ん、むうう！」

現在は使用されていないハンガーの一角で。二つの影が重なり、貪り合う。

絡み合う舌と舌、互いの口内粘膜の感触、味、熱、匂い。

それらはどこまでも人間の、生身の肉々しさに充ち満ちていて、つい先程まで戦術機という鋼鉄の軀で暴れ回っていたステラ・ブレイメルを元の肉体へと還元し、再構築してくれるかのようで。心臓は高鳴り、下腹は激しく疼いて、心は原始の胎動へと近づいていく。戦術機から人間へと戻る過程で、肉の昂ぶりを解放し、一匹の雌になる。

「はむ、ンツ、あ、んふううっ♡ んぶ、はああ」

「ふう、ふう……ブレイメル、少尉……」

年若い整備兵の泣きそうな顔。自分という雌に溺れている貌を見つめて恍惚と微笑みながら、ステラはさらに深く口付けを交わし続けた。

「ん、ちゅぶ、ふう、……んっ、あっ♡ ……うンツ、は、はあ……じゅる、ふうっ、ピチュツ……ふ、ふあ、ああ……んうううっ♡」

全てを味わい尽くさんとするかのような勢いで舌を動かしながら、ステラはあどけなさの残る整備兵の童顔を見て目を細めた。

彼とこのような関係に陥つてから、果たして何度口付けを交わしただろう。そんな間柄だというのに、ステラは彼の名前すら知らなかった。彼がどんなに名乗ろうとしても、いつもやんわりと拒否し続けていた。

自分のような“悪い女”に引つかかってしまった彼への、ステラなりの優しさだ。別にステラは彼を愛しているわけではないし、彼と正式に交際するなりなどまったく考えてはいない。ヴァレリオのような異性との付き合い方とも異なるこれは、例えば唯依あたりには知られたらどんな顔をされるか……想像しただけで苦笑いが出かんでくる。

ステラ自身、この性情についてはよく理解していない。

単純な性欲の解消とも、また異なるのだ。確かに性欲はあるし、彼との行為から快感を得るが、それだけでは無い気がする。だから、ステラはこれを儀式のようなものと定義づけていた。一流のスポーツ選手が試合に臨む際に集中力を高めるため独自に行うらしいものと似ているかも知れない。ステラの場合、それが試合前ではなく、試合後に必要になるというだけのことだった。“超えた”ところから“還る”ために。

「少尉、少尉……っ♡」

「はあ……フ、フフ。どうしたの？ がつついちやって。好き、だからいいけど……こうい

う、情熱たつぷりのキス」

「そ、それはその……ひ、久しぶりだったので……」

久しぶり、と言われてステラは記憶を辿ってみたが、さて前回は何日前だったろうか。考え込むこと数秒、ようやく思い出してみると、

「久しぶりって、たった五日じゃない」

クスリ、と笑みが漏れた。

「五日でも、充分久しぶりです……！ その、自分は……、出来ることなら毎日だつて少尉と——」

言いかけた口を指先で遮り、ステラは少し困ったように眉を寄せた。

「ダメよ。それは、そういうのとは……違うんだから」

「……はい。すいません」

しよんぼりと肩を落として項垂れる彼から向けられる好意はくすぐったいが、それだけだった。ステラは彼を愛することはないだろうし、彼も今はただ熱病に浮かされたように年上の女への感情を持て余しているだけで、遠くない未来それが恋でも愛でもないことに気付くはずだ。気付かなければ、いけないのだ。

「でも、そうね。久しぶりだつて言うなら……」

「あつ！」

「その分、愉しみましょう？ ……ん、……熱っ」

気を取り直し、ステラは彼の口を遮った右手を今度は股間の方へ伸ばすと、既に硬く凝っているそこをズボンの上からゆっくり丹念に撫で回した。

「すごい、元気……確かにこれなら、たった五日でも久しぶりって言いたくなるのもわかる、かも……ふ、うう……ンッ、ふう」

「あう、ああつ、……少尉……あつ、ああ……っ！」

強化服とズボンと下着と。幾重にも遮るものがあるはずなのに、彼のソコは熱も硬さも脈動も、猛々しい雄をこれでもかかとステラの手に伝えてきた。

撫で回す手に力が籠もり、指先が痺れるように敏感になる。

「すごい……コレ、熱いのが……ビクン、ビクン……あ、ふ、ああ♥ 暴れてるわ、あなた……凄く元気に、ペニス……ン、おちんちん……ほら、……ほら……はあ、ああ♥ ……ん、はう、あああつ♥」

「激しつ、少尉……激しい、です……そ、そんな、扱かれたら……あつ、く、ぐあああああつ、しよ……あああ、スッ、ステラさん！」

階級ではなく名前を叫びながら思わず引けそうになっている彼の腰へ、ステラは手早く左腕を巻きつけた。さらに脚を絡ませ、ピタリと密着しながら僅かな隙間で右手だけを激しく動かし続ける。

「凄、凄いの……もう、爆発しそうに……なってる、わ。コレ……ビンビンになった……おちんちんが……」

擦り、扱っているだけで自分も意識が陶然としていくことに、ステラは躊躇わなかった。戦術機に乗った後の昂揚感がそのまま性感へと繋がりが、こうして身も心も昂ぶっていく感覚がたまらなく心地良い。演習を終えたばかりの自分も、つい先程まで整備作業をしていた所を抜け出してきた彼も双方共に汗だくで、その甘酸っぱい香りが、雄と雌の臭気が、ステラを酔いしれさせた。

「ステラさん、き、キツイです……あつ、ぐうう！ じ、自分の……もうパンパンで……あ、ぐ……！」

「そう、そうね……パンパン、だわ。こんなに雄々しく、イヤらしく……勃起して……んはああつ♥ 今、脱がせてあげる……君のおちんちん……限界まで勃起したおチンポ、取り出してあげる……から……あああつ♥」

喘ぎながら、ステラは整備兵の下着の中に手を突っ込むと、直接陰茎を握り締めた。浮き出た血管が激しく脈打ち、指先と手の平から伝わる感覚だけで達してしまいそうになるのをかろうじて堪える。

（ああ……きつと、五日間ずっと私を待っていたのね。……オナニーなんてしないで、ずっと私のことを妄想しながら我慢して、そうして溜め込んだものが……こんな、沸騰して、溢れそうになってる……）

「うあつ、ス、ステラさんうあいいい！」

「……ふ、はああん♥」

我慢汁を手に染み込ませながら、ステラはツナギのズボンごと勢いよく下着をズリ下ろしてやると、雄々しく反り返った肉棒を露わにさせた。

やや包茎気味ながらも、年齢や体格に反して素晴らしく立派な肉棒。パクパクと開閉を繰り返しながらジツトリと先汁を滲ませている鈴口を見つめていると、ステラは目

眩がするかのようだった。

「ああ……出たわね、五日ぶりの……フ、フフ……エッチな、おチンポ……♥」

「あ、うううう……は、はい……五日間、我慢してました……！ ステラさんの、ステラさんに扱ってもらいたくて……しゃぶってもらいたくて……ステラさんのイヤらしいお尻の穴にプチ込みたくて、ずっと我慢してましたッ」

正直な告白に、ステラはご褒美とばかりにカリ首を指先でなぞった。

弱々しく、もどかしく、甘く、辛く、辛いであろう刺激。女のステラには正確に理解するとは不可能でも、これまでの経験から彼がどの程度の刺激でどのくらい感じてくれているのかはわかる。

唇がうっすらと開かれ、白い歯が覗かせながら、ステラは右手の人差し指だけで肉棒を撫で回し、翻弄した。

「ああっ、ス……ステラ、さん……！」

「ピクピクって震えているわよ？ ほら、おチンポ……わかるでしょう？ 私の指で、クリクリってされて……クスッ♥ 可愛い……こんな凶悪な外見なのに、こんなに太くて熱くて硬いの……」

うっとりとはきながら、その場へと屈み込む。

膝立ちになり、丁度胸の高さへ肉棒がくるように。

「あら、また跳ねたわ」

「うっ、あうう……」

「そんなに楽しみなの？」

これから何をされるのか、期待に打ち震える剛直はピクピクと痙攣を繰り返しながら臍まで反り返っていた。その見事さに惚れ惚れとしながら、ステラは胸部の保護皮膜を破り、乳房を露出させた。

寒くはない。寒さなど感じないくらい、全身が火照りまくっている。

「楽しみなはずよね。あなた、おっぱい大好きですもの。……五日間、私のこの胸に挟まれたくて仕方なかったんでしょ？」

囁きかけながら、ステラはツンと勃った乳首で龟头を軽く突いた。

「くっくっくッ!?」

「大きなおっぱいで、はち切れそうなくらい勃起したおチンポ挟まれて、扱かれて、皮ま

で剥かれて……キモチ良く、なりたかったんでしょ？」

ブンブンと臆面もなく首を縦に振る彼の可愛らしさに、ステラは子宮がキーンと疼くのを感じて下腹に手をあてた。

楽しみにしていたのは、自分も同じだ。鈴口から涙を流して震えている肉棒へと、乳房を近付けていく。彼のモノは大きい、それでもスッポリと包み込んでしまえるステラの爆乳が、龟头へと触れる。

「はうっ、んあアアンツ♥」

陰唇を龟头で擦られたかのような感覚に打ち震えながら、ステラはゆっくりと、乳房で形作られた谷間膺のナカへと剛直を咥え込んでいった。

「挿入って、くるわ……あ♥ あなたの、逞しいおチンポが……ギンギンに反り返ってる勃起チンポが、私の胸のナカに。おっぱいで出来たヴァギナの、おっぱいマンコのナカに……おチンポ、ずぶ、ずぶって……はっ、ふあああっ♥」

「あぐっ、あああっ！ ステラさんの、ステラさんのおっぱい！ おっぱいのオマンコが、僕の、僕のチンポを、チンポを呑み込んで……！」

「はあ、は……ふいふいっ♥ ちんぽ、あああ……おちんぽお♥ 汁、又チャ又チャっておっぱいにくっついてる……はあっ♥ イヤらしい音してるっ、おチンポのお汁と汗が、一緒になって混ざって……五日間もしかして精液溜め込んでいただけじゃなくて洗ってもいなかったの？ 凄い匂い……擦るたびに恥垢が、たっぷり出て……ふむっ、うううっ♥」

「ステラさっ、ステラさん！ つ、唾……、唾液も、垂らしてください……ヌルヌルに、おっぱいマンコ、もっとなるヌルに、して……ああっ」

要求に応えるべく、ステラは小さく頷くとそのままクチュクチュと口を動かし、染み出た唾液を胸の谷間へと落とし込んだ。

カウパーと汗と唾液が混ざり合い、泡立ち、淫靡な粘着音をたてる。その光景はまさしく男性器と乳性器による性交そのものだ。

「はあ、はあ……ンツ♥ く、きふ、う……♥ おっぱいのナカで、おチンポお、また硬くなってるわ……んはああっ♥ キミのコレ、おチンポ、やっぱりスゴイ……どんどん、反り返って……おっぱいから飛び出ちやいそうよ……ああっ♥」

「い、やだ……まだっ、出たくなんてない……から！ ……ステラさんの、爆乳マンコに、もっとなるおチンポ突っ込みたいです、から……う、あああ！」



「ひふううんツ!? きやふつ、ふ、お、おとおおおつ♥」

胸のナカへ思いきり肉棒を叩き込まれ、ステラは肺の中の空気を全て吐き出しながら喘いだ。

まるで心臓を直接犯されているかのようだ。

肉棒の脈動と心臓の鼓動がぶつかり合い、同期し、文字通りの全身全霊でまぐわい合うかのようなバイブレーションにステラは酔いしれた。

「ひふう、うふううつ♥ はう、お、おとおおおおお♥ キ、キてる、キてるわあ……

おチンポ、チンポがズン! ズンツ、てえ……ひはっ、んあああひひひひひひツ♥」

「あうっ、あつ、ああああ! ステラさん、ステラさあああん!!」

ズチヌチヌと音を立て、包茎気味の皮を捲られながら肉棒が怒濤の勢いで爆乳腔のナカを抽挿する。もはやいつ射精してもおかしくない状況ながら、彼は懸命に耐えていた。

五日も我慢していたのだから一度や二度の射精で弾が切れるという事は無い。それでも一発一発をもっと食欲に、ステラの身体を、豊熟とした肉体を満喫したい。心ゆくまで味わいたかった。ステラに、自分を味わわせたかった。

とは言えあくまで彼の独り善がりだ。

「ぐう、あつ、あーっ、……はっ、……う、く……」

既に鈴口からは先汁ではなく本汁が零れ始めていた。それでも決定的な射精には至らず堪えている姿は素直に好ましくて、ステラは彼を包み込んだ肉棒を乳房でグツと締めつけると、優艶と微笑んだ。

「はくっ、ああああっ!!」

「……大丈夫よ。五日も溜め込んだんでしょう? 一回や二回射精したって、大丈夫だから。そんなに我慢しないで、射精なさい? ……ほら、私のおっぱいのオマンコに、あなたの汁……ふ、ああっ♥ 熱くて、ドロドロの、五日間熟成チンポ汁を、乳内に……はっ、あつ、んあつ♥」

何より、我慢したくないのはステラもだった。

目の前で溢れ、漏れ出している精液。鈴口からピルピルと少量ずつ湧き出ている青臭い精臭を嗅いでいるだけで、頭がクラクラしてくる。

グツと両脇から力を込めた乳房が歪み、ひしゃげ、何度も亀頭を乳隆外へと飛び出

させてはまた呑み込んでいく。その度に漏れ出た精液は乳肉にこびり付き、染み込み、恥垢やステラ自身の汗と唾液の匂いと混ざり合って鼻腔を、さらには脳髄そのものを犯した。

(精液、欲しい……身体、火照って……胸、焼けるよう……)

剛直による抽挿と自ら乳肉を捏ね回す交接によって熱を帯びたステラの乳房からは、白い薄湯気が立っていた。保護皮膜を破り捨てた胸部分以外の、衛士強化服によって覆われたままの部位にも熱が籠もっている。女“の部分”が途方もなく熱い。熱くなればなる程に自分が生身の肉体を持つ“女”なのだという実感が、認識が深まって、快楽と共にステラ・ブレーメルが嬌声をあげる。

「はっ、ああ……射精してっ、精液……ザーメン……ふ、くひううっ♥ スペルマ、あなたのチンポ汁……乳内に、思いつき射精して……射精するの♥」

「あつ、くう……はっ、……ス、ステラさっ、……あぐっ!? お、おっぱいそんなに締めつけ……ひぎああっ!!」

「射精して……何度も、何回でもっ! 全部、受け止めてあげる、から。いくらでも搾り摂ってあげるから……あ♥」

「うっ、あつ、あああーっ!!」

うつとりと潤んだ瞳で見上げられながら射精を乞われ、整備兵は少年らしい雄叫びをあげて暴走した。

「はうっ♥ あつ、そ、そうよ! そう、もっと、もっと強く、……もっと激しく胸、犯して……あつ、いいいいあああああ♥」

我慢もクソも無い。ただひたすら肉棒を爆乳腔のナカへと突き入れ、叩きつける。ステラの言葉通り、胸を犯す。

たわわな柔肉がブルブルと震え、たわみ、変幻自在とその形を変えていく。肉棒全体に吸いついてくるかのような感触に彼はひたすら酔いしれた。

「はくっ、ああっ、射精ます! ステラさんっ、僕、射精するうっ!!」

「ええ、いいわ……好きなだけ、プチまけて……ッ! 乳内射精で私のおっぱいを孕ませるつもりで……ひうっ♥ だ、射精して、たっぷり特濃チンポ汁、射精してええっ♥」

「あうっ、あつ、あああぐあああああ♥」

乳房の内部で限界以上に膨張しきっていた亀頭が、ついに弾けた。

「ああ、射精してる……射精してるわ♥ ビュルツ、ビュルツで下品な音をたてて、精液が私の胸の中で、射精チンポ跳ね回りながら……あつ♥ つ、強い……これ、なんて、勢いで……はっ、うく、きふうううつ♥ しや、射精しながら腰振って……あつ、ま、まだ……まだ射精するの？」

「だ、だつて！ こんなんじや、こんなんじや全然収まらなくて……はっ、ぐ、ああああ！ ま、また射精ます！ あ、ああああ！！」

「う、嘘、連続で……!? ——ふあああああああああつ♥」

精液を吐き出し続けながらの挿挿から、さらにもう一度亀頭が膨らみ、盛大に爆ぜた。精液の爆発が乳房を内側から圧迫し、衝撃にステラの全身が震える。

「あつ、は、あああ……つ♥」

二度目の爆射でも肉棒は萎えることなく、パンパンにエラの張ったカリ首で乳肉を刮きながら若い整備兵は滾る欲望の全てを吐き出そうと腰を振り続けた。陰茎全体が敏感になりすぎて、もはや何がどうキモチ良いのかもわからない。なのに動きが止まらないのはそこにステラがいるからだ。ステラの爆乳性器がキツく剛直を締めあげ、雄汁を搾り握ろうとうねる限り抜け出すことはかなわないのだと彼はそう認識していた。

「あぐつ、く、はあ……ステラさん！ ステラさんンツ!!」

「はふ、は、はっ♥ ……たくさん、射精たわね……なのに、まだ、全然萎えてないなんて。凄いわ……こんなに凄いわおちんぼ、そうそういないわよ？」

リップサービスではなく、心底からそう述べてステラは乳房にこびり付いている精液を勿体なさそうに指で撫で直し、肌を擦り込んだ。どんなに濃厚でゼリーのようでもあくまで液体は液体、零れ、流れ落ちていってしまうのが勿体ない。吐き出された精液の一滴も残さず自分のモノにしたいという欲求に従いながら、ステラは口の周りに付着していた汁を舐めとった。

そうして、胸の前でビクビクとしまっている剛直を優しく撫でる。

「あうっ！」

「これほど射精したついでなのに、全然足りない、もっともっと射精したいって言ってるわ、この子。五日間、本当に辛くて待ち遠しかったのね。ごめんなさい」

「い、いえ……あ、あう、が……はあ、あ……つ！」

今度は手ではなく、また乳房で。

精液まみれでヌルヌルになった乳肉を亀頭に擦りつけ、ゆっくりと円を描くように揉ね回す。それだけで剛直は腫れ上がり、割れた尿道口からはまた新しい精液が滲み出し始めた。

「まるで底無しね。もうペニス汁が滲んで、又チャ又チャつて……ンツ♥ これ、糸引いてるわ……おっぱいとおチンポが繋がってるみたい。フ、フフ……もう一回、おっぱいで……ん、は、あああつ♥」

「くああつ！ ステラさつ、あ、ああああ！」

「はっ、ひやうつ♥ ふっ、あつ、あーつ♥」

今度は挟むのではなく乳房をグツと亀頭に押し当てて、剛直が柔肉に沈み込む感触を堪能しステラは短く悲鳴をあげた。

濃厚な雄の体液が肌に染み込み、ステラの中の雌が花開いていく。戦術歩行戦闘機という機械の軀体から切り離され、解放されて、今やステラは完全に生身の女へと還元を果たしていた。

その雌肉が、猛る雄肉を包み込み、三度爆発させる。

「あ、あああつ!! イツ、イクツ！ またステラさんのおっぱいの中に、あが、あああああ、でっ射精るううう!!」

「くくくくくッ♥ はっ、あ、あああああつ♥ 射精してるわ、全然、量も濃さも変わらないまま、精液また、ドビュツ、ドビュツ……おちんちんが胸の中で跳ね回って、ギンギンにしながら、暴れているわ……ふ、ああ♥」

三度目にしてまったく勢いの衰えない射精を全身で感じとりながら、ステラは片手で乳房を、もう片手で下腹部を強く押さえ付けていた。

子宮が狂おしく疼いている。

キユンと泣きながら、雌が本当に雌たる部位の秘肉がざわめき、蠢いて、男根を欲していた。

彼もステラのそこに挿入したがついている。もうずっと、関係を持ち始めた頃から入ることを望んで、拒否され続けている。

「……ス、ステラさん……つ」

強化服に包まれたままの股間を凝視しながら、今日こそは、今日だけはと言外に訴えかけてくる彼に対して首を縦に振りそうになるのをステラは堪えた。



いっぱい、いっぱい……搾り搦ってあげる、から……あ♡ パイズリの時よりも、もっと、たくさんのおチンポ汁……ふっ、くひっ……ふうあ、……だから、あなたも、頑張って……は、や、ああん♡」

一気に奥まで貫かれた衝撃から回復し、何とか自分のペースを取り戻したステラはそう言う年上の女の妖艶さで整備兵を嘲弄しつつ尻穴を窄め、腰を回して肉棒を責め立てた。

「はがっ、あっ、ひいひいっ!? ああぐっ、ち、千切れる……! 僕のチンポ、が、食べられて、ああああ!!」

「大丈夫、よ……千切ったりなんて、しないから……んああ♡ こんなに、立派で、ステキなおチンポを、喰い千切るなんて……ん、ふ、……勿体ないこと、絶対に、しないわ、よ……く、ふあああ♡」

勢いよく尻を振り、直腸壁のあらゆる部位で亀頭を刺激してやりながらステラも一突きごとに擦られる肛外粘膜から走る性感に酔いしれた。

獣のような動きで、獣ならまず使わない器官を使ってセックスするそれを人間らしさだと言うのはあまりに論理に欠けると思わなくもなかったが、今はもたらされる悦楽こそが全てだった。

「あっ、ふ、うう……な、内臓……お、押し上げられて……はっ、きゆう♡ お腹、色んなところをズンツて、おチンポでズンツて突き上げられて……は、はお、おとおっ♡ 腸壁、ゴリゴリされて……う、あ、あああ♡ お、お尻なのに……アヌスなのにヒイウ!? し、子宮ううっ♡ 直腸の側から、子宮グリン! つて、え、えぐられ……はっ、くふうういひいひい♡」

「こ、これ? ここですか? ここ、コリコリしてるとこの先に……ステラさんの……ステラさんの子宮が、ある?」

「ひやひいイッ!?」

ズンツと腹の側へ思いきり肉鎚を打ちつけられ、ステラは一瞬意識を飛ばしそうになった。胸中に灯った悦楽の炎が一突きごとに大きく揺らめき、意識を、理性を惑乱させて忘我の際へ堕とし込もうとする。

彼の腰使いは若いのがゆえにがむしやらで、巧拙など一切考えずにただひたすら激しく、猛々しく、ステラが歓喜を漏らしたその部位を徹底的に突き、叩き、穿ち貫いた。

「ほっ、おとおお、あっ、んあああああ♡」

「はあ、ああ……ステラさん、ステラさんツ!!」

今までも決して許してはもらえなかった膣内挿入への不満や欲求を全てぶつけるかの如くに、肉棒は直腸内から子宮を責め続けた。間にあるはずの肉やその他の内臓器官は緩衝材としての役には立たず、快感の電流がステラを狂おしく痺れさせる。

「こ、これ……お、おかし……私、おかし……はっ、ぐヒイ!? いう、あ、おとお♡ はっ、はっ……き、気が、狂う……狂わされて、しまう、はおうううう♡」

言葉とは裏腹、壊れてしまいたい願望のままにステラは尻を振りまくった。知的で、クールで、良いお姉さん役で……そんなイメージを粉々に粉碎するくらいの、尻穴を犯されてあられもなくよがる色ボケしたただの女に堕ちたくて、ステラは迫る喜びに身を委ねた。

「お、おかし、おかし……ステラさん、おかし! ケツ穴ほじられて、イキ狂って、おかし……!!」

「やつ、だ、ダメツ、んひいイッ!? こ、こんなの……はっ、あ……お、おかし……え、……んあああ♡ と、とろけ……はっ、あっ、あっ♡ 蕩かされちゃう、ダメ、ダメよおっ、ダメええええ♡」

もはや限界だった。

反応出来る快感への許容量を超え、意識が愉楽の濁流に吞まれていく。少年と呼んで差し支えない年齢の子の肉棒で尻穴を穿られ、淫らに喘いで絶頂してしまう自分——ステラ・ブレイメルの姿など、唯依も、ユウヤも、タリサも、皆想像も出来ないだろう。けれど今のこれが真実だった。

紛う事無き、ステラ・ブレイメルの姿。

「あっ、あひっ、ひあああ♡ イクッ♡ イクわっ、私、このままお尻抉られて、極悪なおチンポでスポスポ抉られまくってイクわっ♡ イキまくるの、お、あとおとおっ♡」

一切の取り繕い無しに、ひたすら乱れ、貪る。

「ああっ! 僕、僕もう! うっ、うっ、あああああ♡」

「イツて、射精してええ♡ お尻に、お尻のナカにザーメンいっぱい吐き出して、雄汁まみれにしてちょうだい♡ ふあっ、あっ、んあああああ♡」

締めあげる直腸に反発して膨張する肉棒の内部を凄まじい勢いで精液がドクドク

と駆け昇ってくるのを感じとりながら、ステラは抑圧していたものを全て解き放ち、欲望のままにアクメを迎えた。

「あつ、あーっ♥ はあ、ンツ、あヒツ、いいいんおとおお〜♥」

めくるめく悦楽に全身は絶え間なく痙攣し、直腸では射精された大量の精液がジワジワと内壁に染み込んでいく。

「はっぐ、ふ、ふう……ステラさ、んっ、あ、ああつ！」

「〜ッ!? ま、また……やつ、んあああつ♥」

いったいどれだけ射精すれば気が済むのか。底無しのように熱い子種を吐き出し続ける整備兵に感心すると同時にやや呆れつつも、ステラは悦んでそれを受け入れた。最後の一滴を吐き出し終えるまで、何度も、何度でも……



情事後の気怠い空気は嫌いではない。

「……はあ、……はあ」

「……ンツ♥ ……ふ、あ……ああ」

大量に注がれまくった精液が尻穴から零れ、太股を伝い落ちていく感触にピクリと睫毛を震わせながら、ステラは自分に抱きつくようにもたれ掛かっている整備兵の体温を感じて相手を綻ばせた。

息も絶え絶え、汗と汁にまみれ、全身から湯気を発している今の姿を誰かに見られるのはまずいのに、いつまでもこのままこうしていられたらいいのという誘惑に心が揺らぐ。

「はあ……、……うっ」

未練を払い、彼から離れたステラはまず全身に付着した夥しい量の体液を拭うためにウエットティッシュを取り出そうとした。

「あつ……ス、ステラさん……っ」

引き攣るように声をかけてきた彼の眼は捨てられた子犬のようで、いったい何を望ん

でいるのか読み取りつつもその気持ちに伝えるわけにはいかないステラは困ったようにフツと息を吐き、軽く唇で唇を塞いだ。

「……また、今度ね」

その言葉は果たして彼にとってのよすがなのか、それともステラにとってのものなのか。わざわざ深く考える必要は無いだろう。

頬を赤らめ、ポーツとしている童顔へと微笑みかけながら、ステラはなんとも悪い女に引つかかってしまったこの若い整備兵の身上に同情を禁じ得なかった。

〜END〜

あとがき

はじめましての方ははじめまして。そうでない方、こんにちは。
ここまで読んでくださり、ありがとうございます。
TEもアニメ化が決まり、不安一杯胸いっぱい、それでも
やっぱり気になっちゃうって感じです。
アニメの唯依姫がどうなってるやら、って感じで。
ゲームの方も同時期にリリースされるのかなあ、なんて思いつつ、
早く発売してくれればなあと思っております。
それではまた、別の本でお会いしましょう。さようなら。

奥付

誌名	: 艶肛斯衛
発行者	: 寒天
発行サークル	: 寒天示現流
発効日	: 2011/8/13
印刷所	: ねこのしっぽ様
WEB	: http://kantenjigenryu.sakura.ne.jp/

※18歳未満の方の購入を硬く禁じます。

2011.8.13

寒天亦現流